

| | | |
|-----------------------|-----------|----|
| ●マイハート | | |
| ◇好きなことを続ける | 喜屋武稔…… | 3 |
| ●連載／教育のひろば | | |
| ◇豊かな情報を届けて | 日本点字図書館…… | 4 |
| ●新連載／教育一語 | | |
| ◇「タクトの力」「守・破・離」 | 新宮弘識…… | 6 |
| ●実践報告／『ゆたかな心』の新資料を使って | | |
| ◇2年「ほんとうに ほしい もの」 | 立川修司…… | 8 |
| ◇3年「思いきって言ったらどうなるの？」 | 加藤宣行…… | 12 |
| ◇6年「よみがえった速球 ー藤川球児ー」 | 北川 忠…… | 16 |
| ●新連載 | | |
| ◇川柳を道徳に活かす | 松田憲子…… | 20 |
| ●新連載 | | |
| ◇人間関係づくりの演習を活かす | 土田雄一…… | 21 |
| ●新連載／夢追探訪 | | |
| ◇竜馬“を”ゆく | …… | 22 |
| ●新連載／道徳まんが道 | | |
| ◇「だれがしんせつ？」「みんな同じ？」 | 加藤宣行…… | 26 |

本文中の勤務校は平成22年5月19日現在のものです。

●著者プロフィール●

社会福祉法人日本点字図書館▶
〒169-8586 東京都新宿区高田馬場1-23-4
電話 03(3209)0241 (代表)
URL <http://www.nittento.or.jp>
水曜日と金曜日に見学を実施しています。(要予約)

新宮先生弘識先生▶友人から「きみの趣味は道徳教育だ」といわれて、よろこんでいます。

加藤宣行先生▶
筑波大学附属小学校教諭・淑徳大学講師
日本道徳基礎教育学会事務局長
使えるベーシック研究会常任理事
光文書院『ゆたかな心』編集委員

立川修司先生▶原稿を書く時に私が心がけていることは、難しい内容でも、できるだけ分かりやすい言葉で書くということです。ところが、これを実行するのは、とても難しいのです。締め切りを守れなくて、ご迷惑をおかけした時はお許しください。

北川忠先生▶春から新しい職場に。久しぶりの学級担任。子どもたちのはじける笑顔。子どもから元気をもらおうということをいまさらながら実感しています。

土田雄一先生▶千葉大学での任期（5年）を終えて、現場に帰ってきました。「大学と学校（現場）をどうつなぐか」「若手教員の育成をどうするか」が大きなテーマ。できるだけ、学校に足を運んで、自分に何ができるか、何をしなくてはならないか、考えています。

松田憲子先生▶私の勤務する学校は谷津干潟の側です。6年生の教室は4階にあるので、窓の向こうには干潟が大きく広がっています。空気が澄んだ日には、野鳥の後ろに富士山も見え、とてもきれいです。

■小社HP（「ご意見・おたより」コーナー）などを通して『子どもの道徳』へのご意見・ご感想をお寄せください。



好きなことを続ける

イラストレーター 喜屋武 稔



子どものころ

小学生時代は図工・絵が得意でした。担任の先生にほめられて、すごくうれしかったですね。「絵が得意なんだ」って感じました。先生にほめられるのって本当にうれしいですよ。

子どものころはとにかく家の手伝いなどでいそがしかった。男ばかりの8人兄弟で、わたしは4番目です。兄弟が多いので生活が苦しく、家計の足しに母が豚を飼いはじめました。その飼料用に残飯を集める仕事を、兄弟の上のほうから、リレーのように引き継いでやっていました。下の兄弟の面倒もよく見ていましたよ。なので、絵と同様に子守りも得意ですね。

子ども時代の夢は美術の先生になること。大学受験で失敗し、夢はかなえられませんでした。それでも得意な絵を活かせる職業としてデザイナー、イラストレーターになりたいと思いました。そこで、東京のハローワークで仕事を見つけ、夜間にデザイナーの専門学校に通いました。

沖縄

沖縄は生活の中に戦争があるという感じですよ。「戦後」がまだ続いている感覚。平和は大切ですよ。今の子どもたちにも、おじいちゃんやおばあちゃんからその体験を聞いてもらいたいですよね。

沖縄は米軍の基地が多い地域です。ほくの育ったコザ市（現沖縄市）照屋というところで、かつて米兵に対し暴動が起きました。ほくは、まだ小学校低学年くらいだったので後から聞いた話になるんですが、きっかけは米兵の起こした交通事故でした。当時はいろいろな事件があり、その対応にずいぶん不公平感があったんです。

沖縄本土復帰（1972年）の際は、それまで使っていた貨幣がドルから円へと変わりました。当時日本の商品もかなり沖縄に入っていたのですが、15セントから20セントで買えた日本のキャラクターの筆箱が、レートの関係から、急に1ド

ル360円（当時為替レート上は305円だったが、個人保有の現金については360円の特例措置があった）でも買えなくなった、ということもありました。慣れるまでたいへんでしたね。親の給料もドルから円にかわってね。いろいろかわったから苦労しました。

でも、今の沖縄の子たちはすごいですよね。尊敬すらしています。ほくらの時代のように本土へのコンプレックスがなく羽ばたいている。沖縄は居心地が良くてすぐに戻ってきちゃうんですけど、今の子は芸能界やスポーツ界と本当にがんばっています。これからも、どんどん出てきてほしいですね。

続けること

やりたいことを仕事にしていくには、好きなことを継続していくことが大事です。つらくても、とにかく続けること。いやなこともあるけど好きなことが仕事って、やっぱり自分は幸せなほうなんだと思います。

でも、みんな大人になってから気がつくんですが、いろいろと勉強はしておいた方がいい。ゴルフの宮里藍選手も「世界に出るなら英語が必要！」と考えて、英語のインタビューに英語で対応しています。ほくもイラストを描いていて、英語が得意だったら「かっこよく英語を使ってこんなことが描けるのに」と思うことがあります。知っていればいろいろな表現ができるんです。

これからも、そんなに有名にならなくてもいいから、好きなことを続けていきたいですね。（談）

きゃんみのる。
沖縄県沖縄市出身。
日本児童出版美術家連盟会員。
東京デザイナー学院卒業後、デザイナーを経て、イラストレーターに転向。
絵本や学校教材、書籍、ポスターなどのイラストを多数手がける。

豊かな情報を届けて

社会福祉法人 日本点字図書館



点字ブロック

日本点字図書館は、創立70周年を迎えた、東京都高田馬場にある視覚障害者のための図書館です。一般の書店では販売されていない点字図書・録音図書の貸し出し事業などを行っています。建物の外観は、特徴的な流れるような鎖のカーテンで覆われており、これは豊富に流れる滝から落ちる水をイメージし、「視覚

障害者が豊かな情報に恵まれるように」との思いがこめられています。また、図書館の前の道路には点字ブロックや音で道を知らせる装置、視覚障害者の方が通ることを示す標識など、図書館を利用しやすいようさまざまな工夫がなされています。

日本点字図書館は、北海道増毛町出身の本間一夫氏によって昭和15年（1940年）に作られました。本間氏は自身も5歳で病気のため失明しましたが、その後大学にて学び、視覚障害者へ読書の喜びを届ける仕事に力を尽くしました。戦争中は茨城県や出身地である北海道などに蔵書を疎開させ、貸し出し事業を継続し、1948年に事業を正式に再開、現在に至っています。全国に90館ほどある点字図書館の中でも最も規模が大きく、幅広い事業を行っており、中央図書館的な役割を果たしています。

日本点字図書館：外観



点字図書書庫

図書館の職員はパートタイマーの方も合わせると140名ほど、あとは450名ものボランティアの手によって支えられています。事業におけるボランティアの比率が高い事もこの日本点字図書館の特徴で、ボランティアの中には、これまで一人で数百冊も点訳された方や会社への通勤時間を利用して点訳されている方もいます。

蔵書は、点字に訳された点字図書が約8万冊（22000タイトル）、音声で吹き込まれた録音図書が約15万巻（27000タイトル）あります。それらは利用登録をした全国の視覚障害者へ郵送で貸し出されています。

館内はバリアフリーになっています。廊下や階段には手すりがついており、エレベーターも音声で教えてくれるガイド付き、廊下には外の道路にある点字のタイルが設置されています。それらをたどれば視覚障害者の方も、一人で館内を行き来できるよう配慮されています。

ここは“図書館”ではあるのですが、ふつうの図書館のように本を蔵書し、貸し出しているだけでなく、点字・録音図書の作成（印刷製本）、視覚障害者のためのパソコン教室の開催、中途視覚障害者のための点字教室の開催、ロービジョンの人のための「見えにくさの相談会」、視覚障害者用の用具販売など多岐にわたる事業を行っています。海外への支援も積極的に行い、アジア向けに要員育成の講習会、点字技術の指導といった事業にも力を注いでいます。



点字製版機

点字図書作成の現場です。上の写真は印刷用の版を作る機械です。この機械では、亜鉛の薄い版に、点字を自動的に続々と打ち込んでいきます。この機械でできた印刷用の版と、用紙とを重ね合わせ、それをローラー式印刷機で印刷していきます。印刷担当の方々は手早く次々と作業を行います。1日で数千枚の印刷を行なうこともできます。また、コンピューターのソフトを利用し、点字を印刷するプリンターもあります。

実際に点訳された本には、一般の書籍だけではなく、レストランのメニューや遊園地の案内などさまざまな印刷物があります。

元は1冊の本だった物が、点訳されると2冊以上になってしまいます。特に辞書類は膨大な量となり、1冊の英和辞典を点訳すると100冊にもなってしまいます。一般的な国語辞典でも60冊くらいです。通常の印刷では文字をかなり小さくできますが、手で触れて感知する点字は文字を小さくするのに限界があります。この100冊を目の当たりにすると、点訳者の熱意、そして、これらの辞書を使う人々の並々ならぬ思いが感じられます。

録音図書は自館内の録音スタジオで録音されたものです。録音スタジオは、大小合わせて18部屋あり、どの部屋も本格的な収録スタジオです。小

点訳された英和辞典



さな穴がいくつも開いたスタジオの壁は、録音された朗読者の声が、より聞きやすく録音できるよう計算され作られています。読み間違えのないよう、特に地名・人名などの固有名詞につい



録音図書庫

ては、丹念に調べてから録音します。そのような録音図書の作成には、調査の期間も加えると数ヶ月～1年かかることもしばしばあります。

録音スタジオ



点字を打つための点字器や白杖、調理具に拡大読書器など1000品目以上の用具類も館内で販売しています。用具販売だけではなく開発も手がけています。視覚障害者にかぎらず、だれでも自由に購入できるので、ボランティアを始めたいと考えられる方は点字の教材など購入されてはいかがでしょうか。

紹介しきれない部分も多いのですが、日本点字図書館ではこのようにさまざまな事業が行なわれています。そして、「さまざまな事業がある」ということは、それだけ「さまざまな“手助け”ができる」ということでもあると思うのです。人の役に立てることは案外といろいろな方法があり、私たちの身の回りにも「自分にもできること」があることに気がつきます。そのような「自分にもできること」は、周りへのちょっとした気遣いをするとも生まれてくるものなのかもしれません。もう少し目を配れば、もう少し他人を意識すれば、「自分にもできること」が必ず見つかるように思えます。そういった方法のたくさん詰まった場所が、日本点字図書館です。

タクトの力

—教師の臨機応変の教育力

淑徳大学名誉教授

タクトの力は、ヘルバルト（独・1776～1841）の言葉である。

彼は、教育目的を哲学に、教育方法を心理学に求め、科学的・実践的な教育学を追究した教育学者であるといわれている。

彼の教育論は、明治後期から大正にかけて我が国の教育界に大きな影響を与えた。当時導入されたヘルバルト学派の五段階教授法は、予備・提示・比較・総合・応用という形をとるが、これには「教育は、時計の針が動くように正確で計画的でなければならない」とするヘルバルトの教育論が如実に具体化されている。

ところが、その彼をして言わしめたのが、「教育の究極は、教師のタクトの力である」という言葉である。

タクトの力を、臨機応変の力と言ってもよいが、教育の場の状況に応じて適切な教育を行う力である。計画性と臨機応変とは相矛盾するが、教育に限らず、全てのものごとは、相矛盾しあう中に真実があるのではないかと私は考えている。

ヘルバルトは、そういう矛盾をふまえた上で、教育の究極は「教師のタクトの力」であるというのである。

「無構」という言葉がある。囲碁の名誉棋聖藤沢秀行が色紙に好んで揮毫した言葉である。囲碁の対局に臨む場合、無心で臨む心境をいった言葉ではないかと思う。タクトの力と同義である。囲碁を打つ時高段者は、自分はこのように打とうと大まかな図を描いて打つという。ところが相手は自分の思うとおりに打ってはくれない。定石という形や、自分の描く図に拘っているとよい碁は打てないわけであり、そこに無構という心が重要になる。

禅語に「大道無門」という言葉もある。大道つ

まり仏の道に入るには、特定の方法はないという意味である。

無構も大道無門も、タクトの力と同義である。洋の東西や時代を問わず、ものごとの哲理は同じである。

教育にも同様なことがいえる。特に道德教育は、教科教育等に比較して、正解（道德の場合は、よいと思われる心や行為）の幅が広くて深い。

一つの間に関する子どもの反応は、舌足らずな反応・局部的な反応・大局的な反応・行為のあり方に注目している反応・行為を生む心のあり方に注目している反応、中には、話し合いが熟していないのに授業のねらいを見事に言い得た反応もある。そのような多様な反応を持って余し、どのように整理して話し合いを進めたらよいかに迷うことが多い。

そこで教師のタクトの力が要求されることになる。子どもの反応の真意を理解したり、その反応をねらいとの関係でとらえたり、子どもの反応を問い返したり、反応と反応との関係を表層と深層から構造的にとらえたり、それがわかるように内容をまとめさせたり等々、タクトの力が求められる。そして、そのタクトの力は、教師の人間力や教育力によって決まるのである。

重要な仕事には、安易な道はなく難しい。教育という重要な仕事は、生易しいことではないが、タクトの力が発揮できる人間力や教育力を身につけたいものである。

しかし、新任教師の段階から、タクトの力があるわけではないが、四段階という教育方法にすべての授業をあてはめようとする安易な考え方から脱しない限り、タクトの力は身に付かないであろう。

守・破・離

—教師の教育力の成長段階

新宮 弘識

剣道に、守・破・離という斯道の進歩を示す言葉がある。これは、剣道だけではなく、囲碁の上達や教師の教育力の向上にも通用する言葉であろう。

守は、見定める・大切に作る・背かないのように、心構えをいつまでも変えずに保つという意味がある。師の教えや先輩が歩いた道を忠実に踏み行い、それを守り保つのが「守」であろう。先達が工夫し努力して築きあげてきた剣の型、囲碁の定石、授業の型を虚心坦懐に学び、それを体得する段階であろう。

ところで、学ぶは、まねるの意がある。まねるは、猿まねといって蔑視する傾向があるが、私は、全ての基本であると思っている。まねるには、自分ないものを吸収する柔軟性が要求される。頑固者は、柔軟性がないから、まねることができない。

また学ぶは、単に型を学ぶだけではなく、その型を生んだ思想も学ぶということではなければならない。型の「もと」がわかっていないと、次の段階に進むことはできない。

何ごとともそうであるが、「守」にも、限界がある。

例えば、囲碁の定石（型）の数は、数万あるといわれている。その一つひとつを身に付けただけでは棋力は伸びない。具体的な状況に応じて、定石を使いわけることができなくてはならない。相手は定石通り打ってくるとは限らない。定石は、定石の組み合わせや全体のバランスによって生きもすれば死にもする。授業も同様であり、子どもが定石通り反応することは少ない。

定石からはずれたからといって子どもの反応を無視すれば、教育はその光を失う。

授業は、子ども・目標や内容・教材・学級内の雰囲気等によって千変万化する。そこで、型を破るという「破」の段階つまり、授業の型を破る段階に入る必要がある。

しかし、型を破っただけでは、荒れ果てた教育になる。教師には、学んだ型のどこに問題があるかと、その型が生まれた思想を徹底的に追及する苦悩と努力が要求される。諸々の条件に即応した指導の方法を求めて悩み苦しむことである。安易な方法を探そうとしたり、その型に埋没したりしないことである。例えば四段階の道德の授業には、その型の長所があり、問題点がある。それを徹底的に追及することである。道德教育は私の専門教科ではありませんと「破」にわが身をおくことをさげよとする教師がいないわけではない。専門教科云々は教師の都合であって、子どもは教師に、担当してくれる全教科に専門職としての教育力を求めているのである。

苦悩と努力の結果、自分なりの型を見いだした段階が「離」であろう。「離」は、離反ではなく、離れ屋のように、二つ並んで独立するの意であろう。

こうして自分なりの型ができあがる。囲碁界では宇宙流の武宮・美学の大竹・コンピュータの石田・殺し屋の加藤・二枚腰の林等がそうである。

教育界では、華麗な授業あり、重厚な授業ありである。私が筑波大学附属小学校にお世話になっていた頃は、タクトの力や無構の心をもった「離」の教育を築きあげた先輩が綺羅星のように居たことを思い出す。私は、この先輩に、「お釈迦さまの手をもった荻須先輩」「学究派の赤松先輩」というように、敬意を込めて密かによんでいた。

教職歴10年を重ねた教師であれば、せめて「破」の段階にいたいものである。

ところで、守から破へ、破から離に進むには、どのような研修が大切であろうか。学校教育は、公的なものであるから、破や離が、教師の独善になってはならない。次回の課題である。

2年 主題名「おかねの つかいかた」の授業

光文書院『ゆたかな心』の新資料 『25ほんとうにほしいもの』を使って

北九州市立志井小学校校長 立川 修司

1 はじめに

小さな時から、お金について考えていくというのは、とても大切な機会だと思います。

自分が苦勞して稼ぐ大人とは違う子どもだけに、苦勞せずにもらったお金の本当のありがたさを理解させることは難しいことかもしれません。

けれど、だからこそ私たち大人が機会を見つけては話をし、子どもに考えていく場を作っていくことが大事な気がします。学校の学習でも取り上げていただいてありがたいと感じます。

これは、この授業実践が終わって保護者からいただいた感想文です。(授業は、本校2年A組のB先生に実践していただきました。この先、この実践をもとに、論を展開していきます。)

感想文は、まさに、主題名「おかねの つかいかた」の学習の大切さを表しています。

生活が豊かになり、子どものまわりには物があふれ、便利になりました。子どもの持ち物も増え、高価なゲーム機もほとんどの子どもが持っています。しかし、まだ低学年の子どもにとって、物や金銭は親や家族から与えられるものであり、そのありがたさを実感することはまれであると言ってよいでしょう。

従って、実際にお金を使う時だけでなく、道徳の授業で、お金の大切さやその使い方を考えさせることは、前述の感想文にあるように、大切な事となります。

2 主題のねらい

◎物や金銭には人の気持ちが込められていることがわかり、大切にしようとする。

*物や金銭には人の心が込められていることが

分かる。

*人の心の思いを生かし、人の役に立つ金銭の使い道を考える事が大切であると分かる。

*むだ遣いをやめて、金銭を大事に使おうとする。

3 児童の実態から

この実践では、子どものお小遣いについて、事前にアンケート調査を行いました。

・お小遣いをもらっている子・・・64%

・お小遣いをもらっていない子・・・36%

そのお小遣いは、ほとんどの子どもが、両親・祖父母からもらっています。

また、その金額やもらい方などの実態は、個人差・学級差・学校差、地域差も大きいと思われる。

日常にお金を使っている子どもと、必要な時だけお小遣いをもらっている子どもでは、経験の差も大きいと考えられます。

この授業を行うにあたっては、事前に子どもの実態をつかんでおくことが大事だと言えるでしょう。

4 指導の実際

この実践を行うにあたっては、教師用指導書の〈展開例〉にほぼ忠実に従って進めました。指導書の展開例の具体化を図り、読者のみなさんが、授業される時の参考にしやすいと考えたからです。

【導入】

T：これまでに、むだづかいをしたなあと思ったことを思い出してみましょう。

C：旅行で二千円使いました。

C：お店でお母さんにお金を借りて、ガチャガチャをしました。

C：ベイブレードを買いすぎました。

C：ゲームセンターで遊んで、お金を使いました。

展開例

| 主な学習活動 | 指導の方法 | 子どもの心と力の高まり |
|---|--|---|
| <p>①これまでのお金の使い方 でむだ遣いがなかったか をふり返る。</p> <p>②資料『ほんとうに ほしい もの』を読み、金銭 の使い方について考える。 ・お小遣いをくれたおば あさんの気持ちについ て考える。 ・さし絵の場面3～5を 見て、女の子の気持ち を話し合う。</p> <p>・さし絵の場面6～8を 見て、女の子の気持ち を話し合う。 「大切にしたい。」 「どうしようかな。」 「もう一度考えてみよ う。」</p> <p>③自分のお小遣いの使い方 を考える。 ・今ほしいと思っている 物を見直す。</p> | <ul style="list-style-type: none"> ●人と比べるのではなく、自 分がむだ遣いと思う物と思 い出させる。 ●それがむだ遣いだと思うわ けについても発表させる。 <p>〈発問〉むだ遣いにならない お金の使い方について考え てみましょう。</p> <ul style="list-style-type: none"> ●お金をくれた人の思いをお さえる。 ●資料文にそって、それぞれ の使い方を比較しながら考 えさせる。 ●学習活動①の自分のむだ遣 いと比べながら考えさせる。 <p>〈発問〉女の子は、大切に使 うために、どのようなこと を考えて迷っているので しょう。</p> <ul style="list-style-type: none"> ●大切にしたいという気持 ちが、その使い方を考える もとなっていることをお さえる。 ●考え直していく中で、みん なのことも考えていること をおさえる。 <ul style="list-style-type: none"> ●「ほしいもの」と「ほん とくにほしいもの」をキー ワードにして、むだ遣いに ならないお金の使い道を考 えさせる。 ●ほしい物リストを作り、金 額や必要性から、ほん とくにほしいかどうか、ほん とくに必要かどうかを検討さ せる。 | <ul style="list-style-type: none"> ○たくさんあるなあ。 ○もっと早く気づけばよかったな。 ○そのとき使わないで、別の物を 買えばよかったなあ。 <ul style="list-style-type: none"> ○大切に使わないといけない。 ○すぐに使ってしまうのはいけな いかなあ。 ○お金をくれた人の気持ちも考え ないといけないね。 ○借りられる物もあるんだね。 <ul style="list-style-type: none"> ○一人で楽しめる物とみんなで楽 しめる物があるね。 ○お金の使い方は人の心も考え ないといけないね。 ○お金を使ったあとのことも考え ているよ。 ○自分一人のために使ったらもっ たいたいね。 <ul style="list-style-type: none"> ○使う前によく考えてからにしよ う。 ○今すぐ買わなくてもいいよ。 ○女の子と同じように、迷ってし まうなあ。 ○家の人の意見も聞いてみよう。 |

発展

・家庭で家の人とともに『ほんとうに ほしい もの』を読み、お小遣いの金額や回数、ほしい物やむだ遣いについて考えてもらうようお願いする。

C：お金を使いすぎたけど、おもちゃが増えてうれしかった。(エーというまわりの声)

この発言で、エーという声が上がりましたが、授業を参観していた私には、子どもたちは同意できないという雰囲気ではなく、むしろ、同じ気持ちがあるという驚きと同意が感じられました。

この一連の発表を通して、分かったことがありました。

子どもはむだ遣いはよくないことと思っはいるが、お金を使うことやその結果おもちゃや持ち物が増えることは、子どもにとって楽しいことだということです。私は、次の授業展開で、子どもたちが資料に出てくる「女の子」の気持ちになって考える場面が楽しみになりました。

【展開】

本資料は、マンガ風の資料です。授業者はその特長を生かして、一コマごとの紙芝居にして提示しました。子どもたちは引き込まれ真剣にお話を聞いていました。

お小遣いをくれたおばあさんの気持ちを考える発問では、

C：来てくれてうれしかったから。

C：お正月だから。

C：いつも会いに来て欲しいから。

C：これで何か買って喜んで欲しい。

C：女の子をかわいく思っているから。

などが出ました。お金をくれた人の気持ちは子どもなりに気づいています。

続いて、女の子の迷いから、「みんながつかえるもの」「みんながたのしめるもの」「みんながよろこぶもの」を視点に、自分が欲しいと思っている物を見直す、終末に進みました。

【終末】

教師用指導書の展開例に従って、欲しい物リストを作り、それぞれに「ほしいもの」と「ほんとうにほしいもの」を区別して、ほしいものには△、ほんとうにほしいものには○の記号を付けるワークシートを作成して子どもたちに配りました。

一例を挙げてみます。

- ① ガンダム—————○
- ② ベイブレード—————△
- ③ ゲーム用カード————○
- ④ ゲーム用カセット————△
- ⑤ ハムスター—————△

ほしいもの内容として、この時期の子どもの傾向なのか、たまたま本学級に多かったかは定かではありませんが、流行のおもちゃとは別に、生き物やペットが欲しいという子どもが多く見られました。

○や△を付けるにあたり、子どもたちは真剣に迷っていました。

しかし、その迷いが、「むだづかいをしない」ようにするためなのか、女の子のように「みんなのことを考えて」なのか。それとも、自分の欲しい物を「どれかをあきらめよう」とする迷いなのかははっきりしませんでした。授業時間の残りが少なかったこともありますが、やはりここは時間をとってそれぞれの迷いの根拠を発表させたり、グループで出し合わせたりするなどの活動が必要だと感じました。

また、この実践では、欲しい物は5点まで書けるようにして、○の数や△の数を制限しませんでした。かえてこれはよかったと感じています。例えば、本当にほしいものを1点だけ選びましようという条件を付けた場合、「みんながつかえる」などの視点より、自分が欲しい物はどれかという気持ちが優先されてしまうのではないのでしょうか。

導入のところで分かったように、まだこの時期の子どもは、お金を使うことが楽しく、欲しい物が手に入ることはうれしいことと感じています。子どもたちにとって、自分が欲しい物をお金をくれた人の気持ちやみんなが使える物という視点で見直すことは、難しい作業であると言えます。

さらに、本実践は、誌面に載せる都合上、5月に行われました。光文書院の指導資料「道徳の年間指導計画例(案)」では、本資料は11月の第4週に配置されています。指導時期としては、子どもの発達段階も考慮して、計画例のとおり11月あたりで授業するのがふさわしいだろうと感じました。

【発展】

光文書院の指導書には、展開例の終わりに「発展」という項を設けています。その「発展」の説明は次の通りです。『道徳の授業の成果が、どこへ発展していくかを明示した。関連・連携を具体的に記述した項である。』

本主題に当てはめると、次のようになります。〔<発展>家庭で家の人とともに『ほんとうにほしいもの』を読み、お小遣いの金額や回数、ほ

3年 主題名「どうすることが正しいか」の授業

光文書院『ゆたかな心』の新資料

『24 思いきって言ったらどうなるの』を使って

筑波大学附属小学校教諭 加藤 宣行

1. 勇気の授業

次に示すのは、道徳の授業の後、Kさんが道徳ノートに書いた感想である。

今日は、道徳の授業をしたというより、自分が勇者になるためにみんなで考える時間を過ごしたと思いました。

道徳の授業というと、ともするとわかりきったことを表面的になぞって終わりというパターンに陥りやすい。その授業は人ごとである。しかし、このKさんは、道徳の授業をしたというより、自分がよりよい存在になるための時間を過ごしたと言っているのである。このような道徳の授業に対する意識の違いはどこから生じるのであろうか。

2. 「答え先にありき」ではない

道徳の授業で陥りやすい失敗は、あらかじめ教師の求める「答え」が用意されていると勘違いすることである。そして、それに向かって子どもたちの意識をどのように変容させるかという方法論が話題の中心になってしまう。もちろん、教師は自分なりの考えをしっかりとって授業に臨む必要がある。しかしそれは、「こうしなければいけない」という外圧的な解答であってはならない。

例えば、勇気の授業で言えば、「正しいと判断したことは、勇気を持って行う」ということが学習指導要領解説中学年の内容に記されている。これは答えではない。なぜなら、そのようなことは、子どもたちは道徳の授業をする前から知っていることだからである。

どういうことか説明しよう。日ごろ、「勇気を出して発表しなさい」とか「人を助けるために、勇気がある行動ができた人だなあ」というように、「勇気はよいもの」という大前提が知らず

知らずのうちに子どもたちの頭の中に、なんとなくすり込まれている。この「なんとなく」がくせ者なのである。確かに思いきって席を譲る行為はよいことである。勇気を出して友達に忠告することはすばらしい。だが、それが答えではない。それが答えなのだとしたら、道徳の時間の終わりは「お年寄りには勇気を出して席を譲りましょう」になってしまう。しかしそれでは先ほどから述べているように、子どもたちの意識は授業前と何も変わってはいない。当たり前のことを丁寧になり、再確認してお終いである。

3. 資料について

本時で扱う資料は、3年生で扱われている。主題名は「どうすることが正しいか」である。あやと仲良しのともこは、さとみを仲間はずれにしようとするあやの言動に違和感を感じつつも、それを表に出すことができない。その気持ちをごまかしながら、あやともさとみともつきあってきたが、いよいよ決断を迫られる日が訪れた、という設定である。いわゆるオープンエンド的な資料である。「めでたしめでたし」という答えがない。勘違いしないでいただきたいのは、私が2で述べた「答えがない」ということはこういうことではない。

例えば、この資料が最後にともこがあやに「仲間はずれするようなことはよそうよ」と勇気を出して言った場面で終わったとする。すると、「最後に答えが書いてあるから、子どもが葛藤しない」という解釈をされることがある。そして、「この答えを切ってしまうおう」ということで、「答え隠し」が行われる。その結果、授業の展開はどうなるか。「この後、ともこはどんなことをしたでしょう」ということになるのである。まさに、あらかじめ用意された「答え探し」である。そこには子どもたちの主体的な学びは見えてこない。

Kさんの言う「勇者になるためにみんなで考える時間」には成り得ないのではないだろうか。

いくら資料に書いていなくても、子どもたちは「いじめている友達に対して勇気を出して注意することがよいこと」だということくらい、なんとなく知っている。知ってはいるから、聞かれれば、気の利いた子どもなら「きっとともさんは勇気を出してあやちゃんに言ったと思う」などと発言するだろう。それに対して、「いや、そんなことしたら、今度は自分があやちゃんにいじめられるから、できないよ」などという『本音』の発言が飛び交い、最後には、

「じゃあどうしたらいいだろう」

「先生に頼めばいいよ」

「この話を作った作者に聞いてみよう」というように、收拾がつかなくなる。

もちろんこの資料は、そのような展開を意図してオープンエンド的に終わっているわけではない。

4. 展開

では、実際の授業場面を紹介する中で、子どもたちが深く考えていくことができる展開を探っていきたい。

(1)ねらい

- ①勇気にはいろいろな種類がある
- ②正しいことを行おうとするときに、自分に力をくれるのが「いい勇気」である
- ③「いい勇気」は自分も持っている
- ④「いい勇気」を使うと、よりよい自分になることができる
- ⑤勇気について興味・関心をもって日常生活を送ろうとする（必要に応じて行動に移す）

(2)本時

まず、心のノートのページをもとに考える。

あぶないことなのに、弱虫と
言われたくなくてやった人

いじめている友だちに
「やめようよ。」と注意をした人

うそやごまかしを「いけない。」と
はっきり言える人。

えきでお年よりが電車に乗ってきて
まよったけれど、席をゆずった人

おもいきりスピードを出して
下り坂を自転車で競争した人

・「あ、い、う」は正しい勇気だよ

・「え」は思いやりじゃないかな

・「お」はあぶない勇気だ

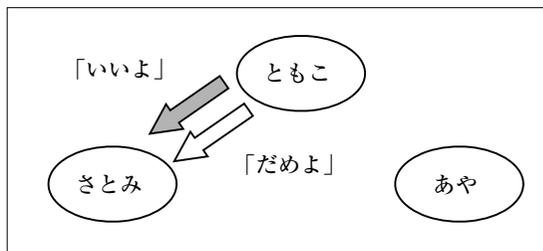
などと、子どもたちは独特の表現で、勇気を分析し始める。

私は、心のノートを4月に子どもたちに渡すときに、「一週間以内に全部読みましょう」と呼びかけている。ある子が、このページに着目し、日記に自分の考えを書き、最後に「先生はどう思いますか？」と私に投げかけてきたことがある。このように、子どもたちは「おもしろそうだな!」と興味が湧いたり、「え、どういうこと?」と疑問を抱いたり、「もっと考えたい」と問題意識をもてば、それに食いついてくる。考え続けるものである。

勇気は、いくつかに仲間わけできそうですね。
どんな勇気があるのか資料を読んで考えていきましょう。

このように呼びかければ、「勇気って何だ」「真の勇気とは?」というような思考の窓口、構えができる。そして子どもたちは、自ずと勇気という観点で考えはじめる。資料を読む構えができたということである。ただ漫然と資料に入るのではなく、このように資料を読む必然性や問題意識を与えることが大事であろう。

資料を読んだ後、「三角関係」を図式化した。



T. ともこはさとみに「いいよ」と言う道と、「だめよ」と言う道がありますね。

それぞれの道について考えてみましょう。

どちらも勇気が必要です。

- ・必要だと思う。
- 「いいよ」って言ったら…
 - ・あやにきらわれる
 - ・友だちをなくす
 - ・被害が大きい

- 「だめ、無理」って言ったら…
 - ・さとみにきらわれる
 - ・でも、友だちはひとりだけしかなくさない
 - ・被害が小さい

T. どっちがいいと思いますか

- ・「だめ、無理」の道かなあ
- ・さとみさんには「あやちゃんに聞いて」って言えばいい
- ・でも、あやちゃんもちゃんと話せばわかってくれるんじゃないかな

T. あやちゃんを信じる勇気をもつということかな。さて、今「だめ、無理」という道、「あやちゃんに聞いて」という道、「いいよ」という道の3つが出ました。自分の考えに一番近いところに手を挙げてください。

このように投げかけて挙手させた。子どもたちは悩みつつ、3つの道にそれぞれ手が挙がり、意見が分かれた。次に、このように発問した。

T. では、どうすることがいいことですか

- ・さとみともあやとも仲良くなること

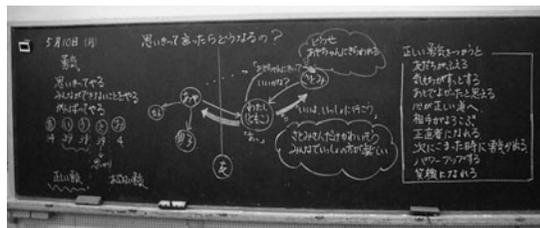
これは、全員の意見が一致した。つまり、「いいこと＝正しいこと」が何かということ、子どもたちは分かっているのである。それを実行に移すためには、自分で自分の背中を押すことが大切。それがよい勇気。勇気というのは、そのように、自分が正しいと思うことを実行に移すことのできる、大切な力であることを、学級全体で共有するのである。

最後に「いいよ」の道のよさについて考える。

「いいよ」の道の（正しい）勇気を使うと…

- ・友達が増える
- ・気持ちがすっとする
- ・やさしくて勇気のある人になれる

- ・他の人にも、いいと思ったことを言うことができる
- ・心が正しい道へ
- ・後でよかったと思える
- ・相手が喜ぶ
- ・正直者になれる
- ・笑顔になる



このように、「よい勇気」という子どもの言葉を使い、子どもたちと価値を分析していくことにより、「こうなりたい」という理想が見えてくる。その理想とは、現実不可能な空論ではなく、人が人として求める道標である。

授業では、そのような「人間のよさ」を子どもたちと共有していきたい。それができた学級は、友達の勇気ある行動に対して、プラスの評価をするようになる。

その後は、「今の〇〇さんのしたことは、この前道徳で学習した、よい勇気と同じだな」などというように、必要に応じて学級担任が子どもたちの勇気を取り上げ、意味づけしてやってやる。これが道徳教育である。ここには、道徳の時間だけで終わらない、人間教育としての学びがある。道徳の時間、他教科・他領域での道徳教育、その双方が補完し合ってはじめて、子どもの道徳性は正しく育つ。

(3) 授業後

道徳ノートに書かれた子どもたちの思いを紹介する。

- ・ちなみに私は「いいよ、いっしょに行こう」がいいと思います。先生はどう思いますか？
- ・正しい勇気を使うと、あやちゃんとさとみちゃんがなかよくなる。気持ちがすっとする。心がパワーアップする。正直者になれる。
- ・今日はいろいろなことを思いつきました。楽しかったです。
- ・今日は、ゆうきということをべんきょうしました

た。ゆうきは本当にいいです。それに友だちも多くなります。私もゆうきをつかってみようって。

- ・この間、こんなことがあったので、このようにやってみればよかった！ これからやってみます。
- ・今日の勉強は、ぜひ私もやってみたいです。私もいっぱいゆう気を使いたいです。発表するのもしゆう気がなかったらできないと思います。

別の学級で、同じように授業を試してみた。そのときの板書が下のものである。



子どもたちは授業後も考え、休み時間になって黒板に出てきて自分の考えを述べ続けた。



5. 考察

このように、授業後、予想以上の反応があった。そして、多くの子どもたちが勇気について考え、実行したのである。例えば、次に示すのは日記の一コマである。

「いい勇気を使った」

今日、学校の帰り道、重い荷物を持ったおばあ

ちゃんがありました。3歩歩くと荷物を置いて、というくり返しでした。

私は、「だいじょうぶかな」と思いました。

でも、「荷物をもってあげましょうか」と言うのが不安でした。でも、勇気をふりしぼり、おばあちゃんに話しかけました。

そうしたら「ありがとう」と言って、カバンを私に渡し、分かれ道まで持って行きました。「助かったわ」と言って、帰って行きました。

いい勇気を使うと、こんなにうれしい気持ちがいってくるのが実感できました。

「いい勇気」を出す満足感。これは授業の（頭の）中だけの話ではなく、実際の自分にとって必要であり、そのような力が自分にもあり、それを使って自分自身の生活をよりよくできると感じた時、ある意味はじめて「わかった」と実感したと言えるのではないだろうか。

そのような授業は、教師のためでも、親のためでも、勉強のためでもなく、自分のために行う、大切な学習になるのである。道徳の授業をそのようにとらえられれば、当然のことながら授業に対する構えも違ってくることだろう。自分たちがよりよく生きるために、みんなで考えようという、何とも前向きで明るい構えではなだろうか。

最後に、Kさんが国語の時間に書いた詩の一部を紹介する。ちなみに彼女が言う「楽しい勉強」とは道徳である。

「楽しい」
 四年生になって分かったのは
 楽しいと感じる勉強があること
 まるで魔法にかかったように
 大好きになった
 自分を変えられるとわかった
 その日から
 学校に行くことが
 楽しくて楽しくて
 たまらない

6年生 主題名「自分を活かす道」の授業

光文書院『ゆたかな心』の新資料 『1 よみがえった速球 — 藤川 球児 —』を使って

石川県小松市立能美小学校教諭 北川 忠

1 はじめに

高学年になり、友だちと自分を比較して考えるようになると、特に目立った特長をもつ子の姿から自己肯定感が低下して、自分もともと持っているよさを見失ってしまうことがある。自分に自信がなくなると、何事にも無気力になってしまい、物事を否定的に考えるようになってしまうことがある。いくら、「あなたは世界にひとつだけの花」といったところで、自分のよさを見出せなければ、子どもには気休めとしか思えない。したがってこの時期は、子どもに自分のよさ、自分らしさに気づかせ、自分に自信を失っている子には自信を取り戻させる、重要な時期であると思う。

2 資料について

阪神の藤川球児選手といえば、日本を代表する投手である。その資料となると、ねらいとする内容項目は1-(2)「希望・勇気、不とう不屈」ではないかと思われがちである。まして、藤川選手の挫折からの復活ストーリーならばなおのこと。確かに藤川選手の地道な努力は無視できるものではない。積み上げられた努力があってこそ、彼の現在の地位がある。

しかし、本資料のねらいは1-(6)「個性の伸長」である。練習すればするほど肩やひじを痛めてしまう危険な投球フォームという短所を、体の柔軟性という長所をもとにした、投球フォームの改造を行うことで、藤川選手は火の玉のようなストレートを手にすることとなった。つまり、長所をもとにして短所を改め、個性を伸ばすという資料なのである。そこで、この資料の前や後で1-(2)の内容項目を扱ってはどうか。二つの内容項目を続けて学習することで、個人個人がもっている長所を伸ばし、よい成果を得るためには、あきらめないで努力する

ことが大切であると、子どもの心の中でつながりやすくなるのではないのだろうか。

このような藤川選手であるが、資料ではなかなか結果を出せずに悩んでいる時期があったことが語られる。子どものときからの夢であったプロ野球に入り、さあこれからというときに、練習すると故障するというのである。このようなジレンマを5年生の子どもたちには理解できるだろうか。私は難しいと思った。したがってこの時期の藤川選手の悩みについて補足して説明する必要がある。

もうひとつ、山口コーチから「体の柔軟性」という長所について述べられるが、「ほくは他の選手と比較してもそれほど体が柔らかいというわけではない。」と藤川選手は述べている。(『藤川球児 ストレートという名の魔球』松下雄一郎著 ヨシモトブックスより)山口コーチの資料文中の発言は、ただ山口コーチと比べて柔らかいという意味である。だから藤川選手は、特に柔軟性を自分の長所と意識していなかったようだ。この山口コーチと藤川選手の関係と長所についての捕らえ方をふまえて、授業に効果的に活かすことにした。

3 資料を効果的に活かす事前の手立て

前の週に「よいところ調べ」という活動を行っておく。周りの人が見る自分のよさについて調査集計させるのである。まず、家族が思っている自分のよさについて聞き取りをさせておき、教室では自分を除く全員によいところをカードに個別に書かせる。このとき多面的に見させるため、いろいろな視点を与えておく。こうしてみんなから集まったカードを、一枚の集計用紙にまとめさせる。すると、自分では長所だと思っていたことが、クラスの友だちは長所だと思っていることに気づく。そして、家族や友だちから教えてもらった自分の長所をもとにこれから伸ばしていきたいと思う内容をまとめさせておく。なお、友だちの

よいところ調べは学級活動として、集計作業とまとめは道徳(個性伸長)として授業を行った。

| 自分らしさとは なんだろう | | 名前 |
|---------------|-------------|----|
| よいところ | もっと伸ばしたいところ | |
| 自分では | | |
| 友だちから | | |
| 先生から | | |

4 本時のねらい

- ◎自分の特徴を知って、悪いところを改め、よいところを積極的に伸ばす。
- ・だれにでもよいところと悪いところがあることがわかる。
- ・よいところをうまく伸ばしていけば、悪いところが隠れていくことがわかる。
- ・自分のよいところをさらに伸ばしていこうとする。

5 指導案

以下の表 参照

6 導入・映像の活用

今回学習した子どもたちは5年生である。クラス全員で21名という少ない児童数である。少年野球クラブに加入している子どもが数名、他のスポーツクラブに加入している子も数名いる。活動的な子どもが多いが、プロ野球にあまり関心のない子もいるので、初めに藤川選手が各球団の強打者から次々に三振を奪う様子を、ビデオ編集して見せることにした。

映像は効果的である。野球について詳しくなくても、次々とバットが空を切る姿を見れば、藤川選手が本当に「守護神」に見えてくる。子どもからも「すごい。」という声が漏れてくる。いい感じで授業がスタートした。

7 展開・前半授業記録（一部抜粋）

T：藤川選手のよいところはなんだろう。

C：速い球を投げるところ。

C：体の柔軟性。

C：練習熱心なところ。

T：じゃあ、よくないところは。

C：投球フォームだよ。

C：練習してもけがしてしまうから損だね。

C：練習しなければいいのに。

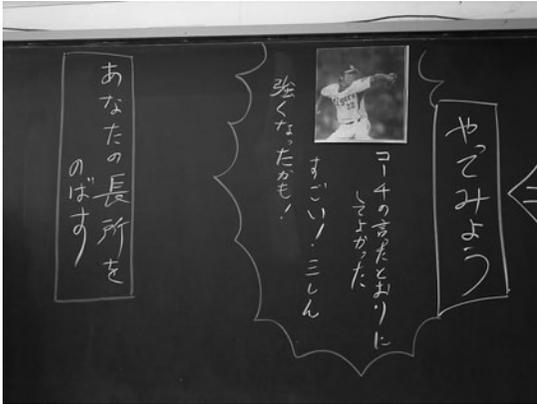
C：そんなにプロは甘くないよ。

T：なるほどそうだね。練習が好きなのに、練習したら肩がいたくて投げられなくなるし、しなければ速い球が投げられないから打たれてしまうし。

C：つらいなあ。

(略)

| 主な学習活動 | 指導の方法 |
|---|---|
| <p>①藤川選手の活躍する姿をビデオで視聴し、どのような選手なのかを知る。</p> <p>②「よみがえった速球」を読み、藤川選手がどのようにして成功につなげたかを考える。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・藤川選手が気づいていなかった自分の短所と長所とは何かを考えて、どのように長所を活かしながら短所を改めたのかを整理してから話し合う。 <p>③長所について考える。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・友だちから教えてもらった自分の長所について考え、さらに伸ばしていこうとする。 | <ul style="list-style-type: none"> ●分りにくいところには解説を加えて、野球に興味のない子どもにも理解させる。 ●体の柔軟性という長所は、コーチとの比較であり、特別なことではなかったから自分でも意識していなかったことを理解させる。 ●コーチから教えられたよいところをもとにした練習と努力によって、自分にしかない個性が現れたことに気づかせる。 ●自分では気づかない長所も、新しい自分作りに役立つことに気づき、意識的に伸ばしていこうとする。 |



- T：山口コーチから新しいフォームを進められたとき、どんなことを考えたでしょう。
- C：本当かなあ。
- C：速い球が投げられるのかな。球が遅くなるんじゃないかな。
- T：迷ってるね。
- C：だって速い球が武器の投手でしょ。遅くなったら、いくら投げがしなくても、打たれるし、試合に出してもらえないよ。
- C：でも、他にいい考えがないんでしょ。やるしかないと思ったんじゃないかな。
- C：このコーチの言うことなら信じてみようかな。昔はすごいピッチャーだったし。
- C：だめなら、引退かも。
- T：最後のチャンスということかな。
- C：そうそう。
- T：それで、やってみようと思ったんだね。
- (略)
- T：試合に出て三振を取ったとき、どう思ったと思う。
- C：コーチの言ったとおりにになった。
- C：すごい。三振がとれる。
- C：強くなったのかも。
- (略)

8 展開・終末

このように、自分では意識していなかった長所が、自分を光らせることにつながった資料を学んだ後で、前時に集約した「よいところ調べ」を再確認させる。そして、自分がこれからもっと伸ばしていきたいと思う長所をみつけさせて、さらにどのように伸ばしていきたいかを考えさせ、ワー

クシートに記入させて発表させる。

ここで子どもたちは、自分でも意識していなかったような長所に対しては、半信半疑なのかさらに伸ばそうとは思っていない。自分でもうすうす感じているが、友だちから伝えられることで「やっぱりそうか」と思えた内容を選択しているようだ。つまり、どの子も自分の長所を、実は理解しているんだなと思えた。

よみがえった速球

名前 _____

藤川球児について勉強して、友だちから教えてもらった「あなたをよいところ」を見ながら、自分のどんなところをどのようにつまみ出したいかを書いてみよう。

- ・教えてもらったあなたのよいところ
- ・どのように伸ばしていきたいかと思ったこと

9 ワークシートより

<友だちが多くて、おもしろい>

もっといろいろな人と仲良くして、もっと友だちを増やしていきたい。おもしろいなんて気づいていなかったけど、もっといろいろな人を笑わせているんな人を笑顔にしたい。

<親切>

私はそんなに親切ではないと思ったけど、親切だと分かったので、これからも男子女子、関係なく親切にしたいです。



ここまで、敢えて短所については触れてこなかったのだが、子どもたちは長所を伸ばすことを考えていく中で、自然と短所を改めようとするようになっていたようだ。

<友だちがいっぱいいる>

私はあまり、お世話好きではない。だから、高学年としてもっと低学年の子たちにたくさんお世話をしてあげて、自分のよいところを伸ばしていきたい。

<体育が上手なところ>

もっと練習してできないところがあつたら上手な人に教えてもらって、もっと練習して、短所を直してもっともっと伸ばしていきたい。

また、この資料はスポーツ少年たちの心に、ストレートに響いていたようだ。

<スポーツ>

テニスをしているので、もっと練習して努力してテニスがうまくなりたい。ほくも藤川選手といっしょで、ボールを打つフォームが悪いといわれました。だから、フォームを直していきたいです。もっともっとがんばろうと思いました。

10 まとめ

前東北楽天ゴールデンイーグルス監督の野村克也氏は、著書の中で「人間の価値は他人の評価で決まる。」（『野村再生工場』角川 ONE テーマ21）と述べている。どんなに自分ではこんなところが優れていると思っていなくても、そのことを他人が評価しないならば、価値ではない。自己評価が甘い者にとっては、厳しい一言である。逆に他人が評価しているならば、それはその人の価値であるということになる。必ずしも長所＝価値とはいえない場合もあるが、自分に自信を失っている者にとって、他人からよい評価をもらえれば、自己肯定感を取り戻せる機会となるであろう。それが、複数あればなおさらである。

すでに述べたように子どもたちは自分の長所について、実は分かっている。しかし、それが自分を輝かせる長所かどうかについてはよくわかっていない。せっかくダイヤモンドの原石をもちながら、磨けば光るダイヤモンドであることに気づかずに途中で興味を失ったならば、捨ててしまうこともあるだろう。だから今回のように他者から自分のよさについて教えてもらう機会があればいいのではないかと思う。

また、長所というのは他の長所と連鎖反応を起こしながら、さらに別の形へ変化し、発展していくものではないだろうか。どんなに努力したとしても、野球少年全員がイチロー選手のようにはなれない。しかし、自分のよいところを伸ばそうと努力した経験は、次の新しい長所を生み出しているはずである。そしてそれはその人にしかない、その人らしさとなって身についていくのだと思う。やはり努力と個性伸長はセットで扱ったほうがいい。

この学習で決意した内容について、二学期になったら、その後どうなったか確認してみたい。このような自分自身を見つめる学びは、意識を継続させるための手立が必要である。期待するほど、すぐに結果が出るものではないと思うが、続けているかどうか、くじけたならどんな理由からかを話し合うのも子どもたちの参考になる。子どもたちの、個性伸長という自分作りの学びは、始まったばかりなのだ。

川柳を道徳に活かす

～自分の心を見つめる川柳作り～

習志野市立谷津南小学校教諭 松田 憲子

五七五の十七音という短い言葉で表す川柳は、行事などさまざまな場面で気軽に取り組むことができる。ここでは、川柳作りを道徳に活かすことを考えていきたい。

子どもにとっての川柳の良さ

なんとと言ってもその短さである。作文が苦手な子どもも川柳作りには気軽に取り組める。また気持ちを表すのにぴったりな言葉を探して選ぶことで、自分の気持ちを見つめることにもなる。さらに川柳は、つぶやくように詠むことができるため、気持ちを飾ることなく本音を出しやすい。

短さは鑑賞にも活かされる。作文は全員の作品を読み合うのに時間を要するが、川柳だとクラス全員の作品でも短時間で読むことができる。共通の体験を題材としながら、さまざまな切り口で作った川柳は、友達への共感や気づきをもたらす。

このように、川柳を作ったりお互いの作品を鑑賞しあったりすることは、自分や友達を見つめ直すことにつながる。

行事を題材とした川柳から

ここで、この5月に行った運動会をふり返り6年生が詠んだ川柳から考えてみよう。

徒競走 ゴールめがけて とび込んだ
組体操 仲間がいたから がんばれた
見たいもの 係の仕事で 過ぎていく
団長の 泣いてる姿に ぐっときた
来年の 運動会も みんながんばれ

それぞれが運動会への思いを込めて詠んだ川柳である。共通の題材であるため、互いに共感を呼ぶ作品がたくさんある。

自分の目標に向かった徒競走、組体操での協力、係としての責任、組のためにがんばった団長への思い、そして在校生への思いなど。これらを作ったり鑑賞し合ったりすることで、漠然としていた気持ちが、はっきりしてくるのである。そして運動会に込められたさまざまな道徳的価値への気づきが生まれる。

このように、川柳から道徳的価値に気づかせることができるが、よりその価値を意識づけるには、さらに視点を与えて川柳作りをすることが有効である。価値への気づきが高まるのである。

視点を与えて

例えば道徳の内容項目等から視点を選び、川柳を作る。

- | | |
|------|------------|
| 1の視点 | 自分の行動や目標から |
| 2の視点 | 友達との関わり |
| 3の視点 | 自然 |
| 4の視点 | 集団全体 |

「この運動会の自分の目標について詠んでみましょう」「運動会で友達との思い出を川柳に詠んでみましょう」等と視点を提示すると、共通の視点からふり返ることができ、子どもたちの思いが深まった。

実は先に挙げた運動会の川柳も、視点を示して詠ませたものである。

「よかった」
六年目 ついに手にした 優勝杯
「大変だった」
運動会練習 五年の時より きびしかった
「ありがとう」
ありがとう みんなのおかげで 優勝できた
「六年生として」
六年の 運動会は あっという間

鑑賞でも自由に作った作品より、最後の運動会を成功させようがんばった気持ちや互いに対する感謝の気持ちが、これまで以上に共感し合えたのである。「本当にそうだよ」「がんばってよかった」「みんなのおかげ、ありがとう」と、友達に共感する言葉がいっぱいになった。

今回は川柳作りのよさを紹介したが、次回は、この川柳をどう道徳の授業に活かしていくか考えていく。

人間関係づくりの演習を活かす

～連想イメージゲーム「いいねえコール」を学習や道徳に活用する～

市原市教育センター所長 土田 雄一

人間関係づくりの学習が必要な子どもたち

「知っていること」(知識)と「できること」(行動)は違う。子どもたちは「失敗したら謝ること」は「知っている」。しかし、実際に謝ることができるかどうかは分からない。道徳もしかり。「形(行動)と心」の両面が大切。気持ちはあっても行動が伴わない「思いやり・親切」は不十分である。親切の大切さが実感をもってわかり、実際に行動することで力となる。理屈や知識だけでなく、体験を通して学ぶことが、今、必要なのである。

光文書院の副読本には、人間関係づくり関連の演習を学年ごとに配当してある。この連載では、有効と思われる活用方法を紹介していく。皆さんの参考資料として読んでいただければ幸いである。

連想イメージゲーム「いいねえコール」を温かい学級づくりに役立てる

5年生に掲載されている「連想イメージゲーム」は汎用性も高く、子どもたちの人間関係づくりにも効果があり、おすすめ演習だ。中学年以上なら十分に可能であり、学習・道徳にも応用できる。

1. ゲームのねらい

人にはいろいろな感じ方があり、感じ方はそれぞれでよいことを、体験を通して知る。

2. 基本ルール

設問(お題)に対して思い浮かんだもの・言葉を書くゲーム。4～5人組で実施。

たとえば「赤い果物といえばなに?」と聞き、5秒程度で思い浮かんだ果物の一つ書かせる。書き終わったら、グループで見せ合うゲームである。回答はリンゴの他、イチゴ・サクランボ・モモな

どがでる。どれも正解。「それぞれの感じ方はよい」というのが基本のゲームなのである。

それを「ぴったり合わせる」や「ばらばらにする」などルールを変えることによって楽しさが増す。設問(お題)は学級の興味関心・季節・行事などによって、工夫するとよい。

認め合う意識を高めるために、「ばらばら」の回答のときに「いいねえ」という言葉かけをする。「りんご」「いいねえ」、「さくらんぼ」「いいねえ」という具合である。これはやってみると楽しい。笑顔がこぼれ温かい雰囲気になりやすい。

このゲームをきっかけに、「いいねえ」が流行し、すてきな意見に対して、自然に周囲から「いいねえ」がでるようになった学級もある。担任が「いいねえ」を活用して、お互いのよさを認め合う学級づくりを進めた成果である。

学習に役立てる

学習への応用も設問を工夫すれば可能だ。たとえば、社会科では「県名をひらがなしたときに2文字の県といえど?」「平安時代に活躍した人といえど?」など。「さんずいのつく漢字といえど?」「リトマス紙が赤くなる液体といえど?」など、教科の学習内容に応じて設問を工夫すれば、授業の導入、前時の復習に活用できる。設問を子どもたちに考えさせることも楽しい。

道徳に役立てる

「一人ひとりのよさを認め合う」演習であるから、「個性の伸長」の道徳資料(5年生では「短所も長所」と関連させて活用すると効果的である。

教師が活用方法を工夫する。それも「いいねえ」なのである。ぜひ一度チャレンジを!

竜馬「を」ゆく

ご存知の通り大河ドラマで話題の坂本龍馬は、土佐藩（現在の高知県）出身の幕末期に活躍した人物である。もともと根強い人気のあった龍馬だが、その人気はまだまだ止まることを知らないようだ。

龍馬が剣術修行のため、江戸にやってきたのは1853年（嘉永6）～1854年（安政元）と1856年（同3）～1858年（同5）の2回。脱藩した後、勝海舟との出会いの地もやはり江戸である。（大阪という説もある。）

高知・江戸・長崎・京都・福井・神戸・鹿児島……。日本中を飛び回った龍馬にとって、江戸という場所はどんなところであったのだろう。今回、修行時から海舟との出会いまで、ゆかりの地を訪ねてみた。

小 千葉道場



龍馬が初めて江戸に来た目的は剣術修行であった。龍馬が修行先を選んだのは、北辰一刀流開祖千葉周作の実弟で「小千葉」とも称された千葉定吉の道場である。この道場の場所は二つあるようで（移転をしたと思われる）、その一つが、東京駅の程近く八重洲2丁

目付近にあった。こちらが龍馬の通った時期の道場なのかは断言しかねるが、ここからは土佐藩上屋敷（現東京国際フォーラム辺り）が目と鼻の先、後述の土佐藩築地屋敷からもそう遠くはない場所である。年代の推測から、残念ながらもう一方の場所である説が有力なようだが、どちらの屋敷からも通しやすい点から、こちらの八重洲説も捨てがたい。

現代ならばこの江戸修行は、上京し体育会でスポーツに取り組む学生のような感覚だろうか、などと考え、20歳前後の剣術修行にいそしむ、龍馬の姿を想像してみるのもなかなかおもしろい。

道場跡から土佐藩上屋敷方面（奥）を臨む。



大 千葉・玄武館

龍馬は、流派の名家筋である江戸三大道場・千葉周作の作った「玄武館」（大千葉）にも通っていたらしい。残念ながらその頃すでに周作は亡くなっていたようだ。小千葉で腕を磨いた龍馬が、さらなる強さを求めやってきたのだろう。龍馬の修行の成果が認められる資料は、長刀（＝薙刀？）の目録のみだが、同時代の人物から「撃剣家」との評があり、その他の目録などの資料は散逸の可

能性も高いようだ。

「玄武」とは北の地を守護する神であり、「北辰一刀流」の「北辰」はこれにちなんでいる。「北辰」は北極星を指し、千葉周作を主人公とした、「北斗の人」(司馬遼太郎著)の題もここからである。

大千葉からは、江戸無血開城の影の立役者・山岡鉄舟や、凶らずも新撰組を生み出した清河八郎など多くの著名な門人を輩出している。おそらく龍馬も修行を通して、人脈を広げていったのではないだろうか。

玄武館跡の碑。「大千葉」道場の跡。



同じく玄武館跡の碑(拡大)。「坂本龍馬」の名前が見える。

土佐藩築地屋敷

土佐下屋敷(築地屋敷)跡。現在の中央区役所から築地警察署にかけての帯がそうであった。土佐勤王党党首・武市瑞山の手紙から、2回目の江戸修行時にこの地で泊まったことがあるのは事実のようだ。土佐勤王党は、龍馬も参加していた、尊皇攘夷を掲げた土佐藩の下士を中心とした集団

である。

屋敷跡は、今では海から少し離れた場所だが、かつては、すぐ近くまで海岸線がきていたらしい。武市が江戸での剣術修業で通った道場(鏡新明知流・士学館)も、この屋敷から極めて近い場所だった。

武市はここで土佐勤王党を結成した。そういう土地でもある。そして、江戸から戻っていた龍馬は、土佐の地で勤王党に入党することとなる。龍馬は土佐で第1番目の入党者、全体でも9番目の入党者(総勢では200人近くいた)である。武市とは縁戚であり、幼馴染でもあったことも影響はあるだろう、龍馬は党内で比較的有力な立場にあったことがうかがえる。もちろん、江戸で身につけた剣術の評価もあっただろう。小千葉では塾頭まで任されていた、との話である。

土佐藩築地屋敷跡。現在の中央区役所から築地警察署辺り。



伝馬町牢屋敷跡

吉田松陰の碑。龍馬は松陰の弟子の長州藩士と深く関わる。

佐久間象山も龍馬に関わった人物である。龍馬は短期間であるが象山の西洋砲術の弟子であった。象山には龍馬生涯の師である勝海舟も師事している。そして、幕末の思想家・吉田松陰も象山の門に名



を連ねている。長州藩士久坂玄瑞や高杉晋作といった松陰の弟子たちと龍馬の関わりは深い。象山を中心とした相関関係は、幕末史を紐解く上で無視できない。ちなみに、しばらく前に「米百俵」で話題になった、小林虎三郎も象山門下の高弟の一人である。

象山は、松陰の米国船密航事件に師匠として連座し、江戸伝馬町牢屋敷に投獄される。さらにその後、松陰も「安政の大獄」で捕らえられ、松陰は同地で刑死することとなる。

現在、その跡地の一部である十思公園には、松陰最期の地を示す石碑がある。現在は、多くの人々が寛ぐ公園となり、かつて牢屋敷であったことは偲ばれない。その隔たりの大きさに思わず時の流れを感じてしまう。

蘭学弾圧の「蛮社の獄」で、高野長英が囚われていたのもこの牢屋敷である。この事件は龍馬4歳（数え年）のときに起きた。松陰入牢の20年ほど前になる。長英は、「モリソン号」という異国船の扱いに関して、幕府を批判する著述を著した。この件は15年後、黒船の来航とも関わりがある。

かつての牢屋敷跡も多くの人が寛ぐ公園に。



福井藩上屋敷

福井藩上屋敷跡。
今はオフィス街。



福井藩上屋敷跡も龍馬にとっては重要な場所だ。福井藩主、幕末四賢侯の一人松平春嶽（土佐藩主山内容堂・宇和島藩主伊達宗城・薩摩藩主島津斉彬）。龍馬はこの春嶽より勝海舟への紹介状を取り付けたようだ。龍馬が会いに行った際は、新しく作られた江戸幕府の要職「政事総裁職」にあった。幕政の中樞にいた人物である。そのような高い身分の春嶽と、龍馬がどういった経緯で会えたのかは定かではない。春嶽は、身分の上下を問わず面会していたというが、だからといって、求めのすべてに応じていたとも思えない。江戸で名声のある千葉道場の人脈であろうか。

勝海舟との出会いは、龍馬が海舟を斬りに行った、との話が流布しているが、どうやら春嶽の紹介状を携えた正式な面会だったようである。後々、海舟自身は「龍馬は最初、俺を斬りに来た」と言っているが、話を大きくしたがる性格の、海舟特有の法螺話の可能性が高いようだ。いやいや龍馬は内心斬ることも考えていたのか……。後代からはその心中を図りきれない。

神戸海軍操練所の資金援助など、春嶽は先々も龍馬と関わっていくことになる。「船中八策」など後に大政奉還へとつながる思想にも春嶽の影響は深い。

勝海舟邸

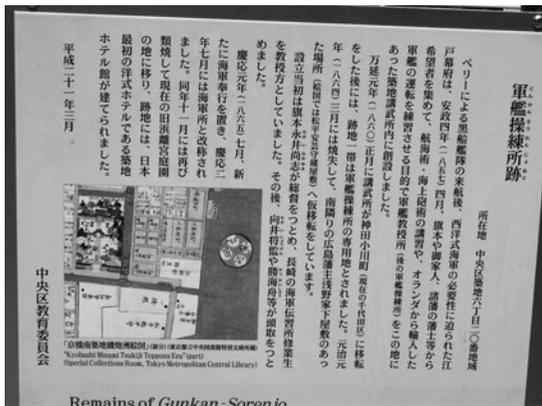
勝海舟邸跡にはマンションが立つ。



さて最後は、赤坂にある勝海舟の屋敷跡である。名前に「坂」がついている通り、赤坂は今でも坂が多い。海舟がこの場所に住んだのは1959年（安政6）～1868年（明治元）。龍馬にとっての勝海舟邸は、最初から最後までこの地であったようだ。（赤坂には別時期の勝邸跡もある。）

海舟は、咸臨丸でアメリカに渡航した経験から、当時の日本を守るため、海軍（海運）の重要性を認識しており、幕府の、日本の海軍創設に深く関わる人物である。龍馬は海舟より、船を操る技術や政治組織のあり方など、多くのことを学ぶことになる。

軍艦操練所跡。現在の築地市場付近である。



龍馬は姉乙女宛の手紙にて海舟を「日本第一の人物」と紹介した。

この「日本第一の人物」との出会いにより、龍馬のスイッチが入り、歴史の舞台へ一気に翔けださせることになる。この赤坂より、日本国中をまたにかけて龍馬の活躍がはじまったといえよう。海舟は師として龍馬に進むべき道と推進力を与え、やがてそれが歴史を動かす力となっていくのである。

ついでながら、海舟の最期の言葉と伝えられるのが「コレデオシマイ」。本当かどうか。しかし、いかにも海舟らしく、本当にそう言ったのではないか、という気にさせられる。「日本第一の人物」の一言に大きな魅力を感じてしまう。

終わりに

江戸時代、江戸は政治の中心であり、当然、歴史の中心舞台の一つでもあった。特に幕末と呼ば

れる時期は、激動の時代であったと広く認識されている。しかし、（歴史にifは禁物だが）もしも、龍馬が土佐に居つづけたのであれば、歴史の表舞台には上がらずじまいであったらう。

日本中から多くの人間が集まっていた江戸。そこで龍馬は、剣術で己を磨き、多種多彩な人々と出会い、やがて生涯の師を見つけた。江戸は、坂本龍馬という一人の名役者を、羽ばたかせるきっかけを与えた舞台（地）だった。そうとらえたいと思う。

このコラムのタイトルは、司馬遼太郎氏の「竜馬がゆく」をもじったものである。故にタイトルでは司馬氏に準じて“竜馬”，文中では“龍馬”と表記させていただいた。

【参考資料】

- 『坂本龍馬大事典』（1995 新人物往来社）
- 『エコ旅ニッポン 東京幕末維新を歩く旅』（2008 一坂太郎著 山と溪谷社）
- 『坂本龍馬地図帳』（2009 小美濃清明監修 人文社）

高知・桂浜の龍馬像。今も龍馬は大海（太平洋）を臨む。



4 コマ漫画でつかみは OK



1. だれがしんせつ?

1コマ目……茶髪のお兄さん

2コマ目……一般の男性

3コマ目……優先席を譲る男子学生

みんな席を譲るという行為は同じです。でも、「お!？」と思う程度が違うような気がします。それともみんな同じなのかな？

こんな疑問から授業に入っても面白いのではないのでしょうか。

教師 「どのコマが、一番親切だと思いますか」

児童 A 「1コマ目、だって茶髪のお兄さんなんて一番譲りそうもないもん。普通の男性は普通に譲りそうだし、優先席なら譲るのが当たり前」

児童 B 「だけど、当たり前のことを当たり前にできる2コマ目の男性の方が、偉いような気がする」

教師 「さて、今日は親切ってどういうことなのかについて考えていきましょう」

このようなやりとりから、本題へと入って行けそうな気がするのですが、いかがでしょうか。

道徳が行為としての結果のみを求めるなら、万人に同じ行為を求めればよい。そしてそれは目に見えるからわかりやすい。目に見えるということは、評価もしやすいということです。できたか、できないかを見ればよいのだから。

しかし、人間の心はそんなに単純ではありません。道徳では、そのような行為を生んだもとななる心の動きにスポットを当てるべきです。だからこそ、その見えない心を見る枠組みが必要なのです。

その枠組みが、この4コマ漫画です。

「優先席だろうが、茶髪だろうが、相手のことを考えて席を譲ることができる人のことを親切な人というのだな。」

そんなまとめができたらよいと思います。

道徳授業の工夫

筑波大学附属小学校教諭 加藤 宣行



2. みんな同じ？

席を譲っていない3つの場面。

- 1コマ目……おしゃべりに夢中な女学生
- 2コマ目……居眠り、読書、自分の世界
- 3コマ目……気づいてそわそわ女の子

何もしていないという「行為」はどれも同じです。「では、3つの場面は同じなのでしょうか。」

このように、導入で子どもたちに投げかけたとします。場面設定通りに考えれば、子どもたちは、1コマ目が一番よくないと答えるでしょう。2コマ目は仕方ない。3コマ目は心では気にしているけれど、1コマ目は無視しているからと。

ただ、ここで安易に「席を譲ることが大切、どうしても譲ることができるでしょう」などと方法論にすり替えてはいけません。このような体験は、多かれ少なかれ、誰でも経験していることなのだから。それが人間です。それを前提として、どのような心持ちが大切なのかについて考えさせたいものです。

3コマ目のそわそわ女の子は親切かどうかについて考えてもよいでしょう。譲っていないから親切ではないとする意見と、心があるから親切だという意見に分かれると思います。

ここではこの女の子のそわそわのよさについて考えさせたいものです。全ての親切な行為の出所はここです。それを思いやりとか惻隱の情などと呼ぶのです。

思いやり・親切の授業をした後、最後にこの4コマ漫画を見せて問うてもよいでしょう。「みんな同じなのかな？」

少なくとも、公の場では自分以外の人に対する心配りができる集団を作りたいものです。周囲に対する思いやり、今の世の中、それが一番必要なものだと思います。